

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2015年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 キリスト教学	研究科	キリスト教学	専攻
<b>研究代表者</b> (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名		
	キリスト教学研究科・キリスト教学専攻・博士課程後期課程2年	橘 耕太		印
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名		
	文学部・教授	廣石 望		印
<b>自然・人文・社会の別</b>	人文	<b>個人・共同の別</b>	個人	
<b>研究課題</b>	最初期キリスト教の拡大とユダヤ人共同体ネットワーク			
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名		
	キリスト教学研究科・キリスト教学専攻・博士課程後期課程2年	橘 耕太		
<b>研究期間</b>	2015 年度			
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円			

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

最初期キリスト教共同体の形成モデルの考察を、聖書資料、聖書外資料ならびに同時代の地中海世界文献資料と碑文資料を用いながら、特に(ディアスポラ)ユダヤ人共同体、任意団体と比較し、類推することで行う。さらには同様のアプローチを用いて、最初期キリスト教共同体が形成した超地域的ネットワークの再構成を最終的な目的としている。

本年度はその中でも、エルサレムのユダヤ人共同体、ローマのユダヤ人共同体、そしてギリシアのデロス島のユダヤ人共同体および任意団体に考察対象・仕様資料を限定し、かつ出身地別の共同体(同郷者によって外地で形成された共同体)に類型を絞り、先のテーマに取り組むこととなった。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 最初期キリスト教 ] [ ディアスポラユダヤ教 ] [ 共同体 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

最初期キリスト教はどのように形成され、発展拡大していったのか。その問いに対して、最初期キリスト教の形成モデルとは何か、をアプローチの鍵として、最初期キリスト教共同体、特にそれが形成した超地域的ネットワークの再構成を目指す。

その目的に際して、現在学界で比較事例として検討されているものの中から「ユダヤ人共同体」と「任意団体 (Voluntary Association)」を挙げる。資料としては、新約聖書資料、聖書外資料、文献資料といった従来参照されるもののほかに、碑文資料、考古学資料を用い、それらをクロスオーバー的に使用することによって、最初期キリスト教研究の問題点となっていた資料の欠乏を解消することを可能にする。

すなわち、最初期キリスト教の形成・拡大の過程で、どのように彼らが自分たちの出自であるユダヤ人共同体、および同時代の周辺地中海世界の任意団体との関係を保ち、また参照・利用したのか、そして地中海世界全体にすでに張り巡らされていたそれらのネットワークとどのような相互関係を持ち、競合し、併存し、敵対し、利用したのかを明らかにする。

以上が 2015 年度立教 SFR における大きな研究テーマである。次にその期間の研究成果について詳述するが、その前に基本名称の説明のみ行うこととする。

最初期キリスト教共同体とユダヤ人共同体については、一般的に「教会」、「会堂 (シナゴグ)」と呼ばれるものであるが、本研究はその形成期にあたるものであるために、それぞれの言葉の定義に必ずしも合致するわけではない。そのため、本報告書では、一貫して最初期キリスト教共同体およびユダヤ人共同体と表記する。

次に「任意団体 (Voluntary Association)」についてである。この共同体については、現在日本で紹介されることがほとんどないものであるため、一応の定義を以下に記す。「任意団体」とは、当時の地中海世界に存在していた、最大の共同体単位である都市 (およびローマ帝国) と最小の共同体単位である「家」の中間に位置していた各種共同体の総称である。それらは①会費を支払い、共同体規則に同意し、そして会員名簿に載ることで入会が完了する。②会員が平等な決定権を持ち、執行部を選出する。③パトロンが存在する。といったいくつかの共通点を持ってはいたが、実際は多種多様なものであったために、それらの定義が必ずしも適用できるものではない。「任意団体」は政治的利害、職業、宗教 (崇拜対象) といった諸要素を複合的な基準として形成されていたが、外部からの居留者が多い土地や人口の多い大都市では民族別・出身地別の「任意団体」も存在していた。(本研究でデロス島やローマに対象地域を設定したのもその理由が大きい。)

以下、本年度の研究成果を詳述する。本研究期間において幾度かの研究発表を経たが、その最終的な成果として、2016 年 4 月 3 日に古代・東方キリスト教研究会において研究発表を行った。

先に本研究の概要を記したが、より細かいテーマとして、エルサレム近郊で出土したテオドトス碑文 (CIJ 2.1404(SEG 8.170)) と使徒行伝 6 章 9 節を対応させることでユダヤ人的出身地別の共同体の存在を仮定し、それらの、宗教的ネットワーク形成への寄与の可能性について考察することとした。

**1. テオドトス碑文 (CIJ 2.1404(SEG 8.170))**

テオドトス碑文は、20 世紀の初めにエルサレム近郊で発見された碑文である。その碑文年代は発見以降、幾度かの議論を経て現在では紀元後 70 年以前とするのが定説となっている。以下にその本文を挙げる。

### 研究成果の概要 つづき

「ウェッテノスの息子、祭司および会堂長、会堂長の息子、会堂長の孫テオドトスが律法の朗読と戒めの教育のためにこの「会堂」を、また、異国から来る人々が必要とする宿泊所とするために宿舎と付属施設や給水設備を建てた。その基礎は彼の父祖たちと長老たちとシモニデスが築いた」

この碑文はイエスと同時代の碑文であるとともに、「律法の朗読と戒めの教育」、「給水設備」、「会堂長」の世襲および「祭司」との兼務の可能性といった当時のユダヤ人共同体を研究するにあたって有用な情報が数多く記されている。しかし、本研究で注目するのは「異国から来る人々が必要とする宿泊所とするための宿舎と付属施設」という部分である。ここから導出できるのは、居留者（ここでは巡礼者）用の宿泊施設を持つユダヤ人共同体の存在である。

#### 2. 使徒行伝 6 章 9 節

この聖書箇所には「『ローマの解放奴隷』、キュレネ人、アレクサンドリア人のいわゆる会堂に属する人々、キリキアとアジア出身の人々」と記されている。ここには「『ローマの解放奴隷』、キュレネ人、アレクサンドリア人のいわゆる会堂に属する人々」と「キリキアとアジア出身の人々」の二つのグループが示されている。そしてここから導出されるのは、出身地を形成基準としたユダヤ人共同体の存在である。

テオドトス碑文と使徒行伝 6 章 9 節から言えるのは、出身地別に形成された共同体が同じ出身地の居留者を受け入れていた、ということである。それによって共同体の成員は自分の出身地との関係性を継続的に更新することが可能になり、そのことによってある種の共同体ネットワークの形成に寄与したのでは、という推論が成り立つ。

3. 先の推論を（特にディアスポラという状況において）補強するのが、ローマのユダヤ人共同体とデロス島の「任意団体」との比較である。ローマでは、ユダヤ人カタコンベの碑文から 11 のユダヤ人共同体の存在が確認される。それらは共同体形成基準に関して奥津下に分類することが出来るが、その中の三つが共同体成員の出身地名を冠したものである。

また、デロス島も外地人の往来が盛んであった商業中心地ゆえに、出身都市の名を冠したいくつかの「任意団体」の碑文が確認されている。

それぞれ、先の推論を当てはめることが可能であり、その正当性を高める役割を担うことが出来るものである。今後、他の比較事例を増やすことで、本研究で提示したテーゼはその妥当性が証明されるものである。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

・橋耕太「使徒行伝 6 章の『ヘレニスタイ』はだれか—その歴史の実体と地理的拡大」『聖書学論集』、47 号、2016 年。(掲載予定、掲載は決定済)

② 図書

なし

③ シンポジウム等

なし

④ その他

・「デロス島における『結社』とユダヤ教共同体」(古代世界研究会サマーセミナー、2015 年 9 月 19 日、於東洋大学白山キャンパス)

・「デロス島における『結社』とユダヤ教共同体」(日本聖書学研究所例会、2015 年 9 月 28 日、於日本聖書神学校)

・「ユダヤ的出身地別共同体とテオドトス碑文」(古代・東方キリスト教研究会、2016 年 4 月 3 日、於東京大学駒場キャンパス)